

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて

山内舜雄

まえがき

この稿は、去る平成九年十月十六日、愛知学院禅研究所における講演要旨である。文語体となっているが、内容に大差はない。多少、加筆があるのは諒承されたい。

それにしても初代所長の伊藤猷典先生、二代所長の田島柏堂先生、そして三代所長の竹内道雄先生、これら三先生の写真を当研究所で拝した時、感慨深いものがあつた。殊に伊藤先生には戦後間もないころ発足した宗学大会に、老体に拘らず、あの困難な交通事情の中を必ず名古屋から出席され、『生死』の巻の偽撰説を始めその気迫に溢れた発表を、司会をやりながら拝聴した思い出が今も鮮烈に残る。

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

そして司会の私の傍で、ベルを押ししていたのが、外ならぬ東大の院生であつた鎌田茂雄先生であることも、この際つけ加えておく。田島柏堂先生は、戦前から存じ上げており、永い間ご指教を頂いた。竹内道雄先生とは早くから親交があり、今も続いている。

これら三先生の御研鑽の上に、当研究所の基礎が築かれ、現在の発展があるかと思うと、そこに三十年に及ぶ学統の軌跡が改めて顧みられる。

講演に先立ち、現所長の中祖一誠先生は、筆者の紹介かたがた現時の『正法眼蔵』研究の動向に触れられ、宗門としてその基準を示す必要性を適切にも強調された。これは筆者年来の主張で、殊に『聞書抄』の研究に従事する身に

は骨身に堪える発言であり、以下、及ばずながらその線に沿って論旨をすすめた次第である。

一

まず、本証妙修の解釈をめぐる諸問題から入る。宗学の立場から『眼藏』解釈の基準線を示せと云っても、それは具体的には宗旨のスローガンである本証妙修をいかに解するかにある、と云っても決して過言ではない。

畏敬する宗学の先達、鏡島元隆先生も、本証妙修こそ道元禅の特質を示すものと強調される。私も、そう思って本証妙修の源流を中古天台に求めた。これには私と鏡島先生の共に恩師に当たる衛藤即応先生の徳憑で、私が叡岳に登ったことに端を発する。ここから話すと長くなるので、叡山研学中の天台の碩学たちとの、この問題に関するやり取りは、ここでは省略する。

宗学側から、この問題を取り扱うばあい避けて通れないのが、例の本来本法性の疑団に対する解明で、それは道元禅の出発点であると同時にまた、帰結の本証妙修と内容的に見合うものでなければならぬ。

すると、どうしても当時の中古天台の主流をなした恵心流、それは道元禅師が叡岳修学中に居られた横川よかを発祥の地としている。道元禅師は、従ってこの恵心流を学んだわけ、恵心流では、この本来本法性の疑団に対しては、どのような解答が用意されているか。ことは天台で起きた問題であるから、まず天台側の解答を求めべきで、これには永い時間を必要とした。と云うのは、日本天台をやる前には、その本源の中国天台は『法華三大部』を修得しなければならず、日本天台に移っても中古の口伝法門、その系統をなす恵心流に及ぶまでには、ゆうに三十年を要する。

その経緯を示すささやかな成果が、『道元禅と天台本覚法門』という初著で、ここで天台側の解答を審細に吟味すると共に、これに対する道元禅の立場を詳細に検尋した。これには幸いにも、天台での恩師山口光円先生が、恵心流を能くし、恵心点による『法華三大部』の口授を承けたことが大いに役立った。「道元さんなら恵心流やで」との言が、懐かしく耳底に残る。その上、自坊の曼珠院には、口伝法門の集大成とも云うべき『漢光類聚』の編者と目される東陽房忠尋が住しており、忠尋についても聴くことが

多かつた。この好縁がなかったら、私のその後の研究はあり得ない。後年私は、『天台本覚論』の講読を永いこと駒大の大学院で講ずることになる。その機縁はここにある。そして俗慈弘師の『辨道話』に関する戦前の論文に触発されて、戦後の本覚法門の研究をリードされた田村芳朗氏の業績にゆき着き、一方では宗学の分野から早くも本覚法門に深い関心を寄せていた鏡島先生と、田村芳朗氏との本覚法門論争を再吟味する結果となり、ここに本証妙修の再確認へと、及ばずながら立ち向かうことになる。

以上が、中国天台から日本天台は中古天台、世に云う本覚法門への、私の辿った重い足どり、迂遠な私には三十年の歳月を要したことになる。そして道元禪師は、本覚法門を受け入れるどころか、痛烈にこれを批判していることが、前記の俗師の論文を通して明瞭になって来た。ありていに云えば、本証妙修は、本覚法門にはなかったのである。本証妙修の源流を求めて恵心流の研究をしたことは、完全にカラ振りに終わったのである。この時ほどガツカリしたことはない。三十年のあいだ文字どおり他国を踏躡したにすぎない。

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

と同時に、本証妙修の本質が、だんだん解って来た。通常われわれは本証妙修について宗学の先達たちから、次のように聞かされて来た。単純に云えば、それは本証を前提として仏性の存在が先ず説かれ、そこから一切の仏作仏行を経て不図作仏に至り、不染汚の修証が高調されて、翻つて見性待悟の臨濟禪批判となる。

さらにそれは、本証の信に基づく坐禪を主張した衛藤宗学になると、本願・本証・本門を踏まえて本覚法門からの演繹的解釈が可能となり、近代宗学形成の道を歩むことになる。

如上の路線に沿って私も、本証妙修に関するいくつかの論文を書き、それらは若き日の労作として現在遺っているから、今さら弁解のしようもないのであるが、顧みるとまことに忸怩たるものがある。

往時とは、本証妙修の理解が、本覚法門批判を経過して見ると大きくかわらざるを得ないことが、明瞭に看取された。本証を先取りすることは、たとえそれが信であっても、いわゆる本覚取りとして道元禪師が、最もきびしく拒否したことでなかったのか。その点、道元禪は本覚法門批判

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

の上に成立しているとさえ云つてよい。従つて『正法眼蔵』は、本覚法門批判に副つて解釈すべきであり、本証妙修も、すくなくともこの線に副つて理解すべきことが分明となつた。

けれど私の研究は、遠く衛藤宗学に発し、鏡島先生の緻密な文献学に裏付けられた末の、田村芳朗氏との論戦を経ているので、その歩みは遅々としておそく、論点もしばしば変移して晦渋であり、人目を惹くものでは決してなかつた。

それが一転して陽の目を見るようになったのは、例の宗学論争にまで発展した、若い研究者たちの本覚思想批判であつた。その発点と経過については、本日ふれるいとまはないが、私なりに『第三聞書抄の研究』の付録でまとめおいた。私としては全くチベット学やインド学からの本覚思想批判は予想もしなかつたことであり、鏡島先生の研究を踏まえて、『眼蔵』書誌学に詳しい河村孝道先生と三人して内輪で片付ければよい、と正直思つていたくらいである。それが、たいへん大がかりの本覚思想批判を、袴谷・松本の両先生が展開され、本証妙修こそ諸悪の根源と云う

ような風潮となり、これには本証妙修について中古天台は、恵心流批判から疑義を呈した私自身が驚いた。私の場合は、局られた中世の疑義を提起したにすぎなく、とてもインド・中国の仏教を視野に入れた立論ではない。

禅学を専攻された石井修道先生も、本証妙修の本覚思想的解釈には危機感を抱かれたひとりであり、その書誌学を踏まえた宗学からの主張には首肯すべきものがあり、過般の宗学論争に関しては先ず石井先生の書かれたものを読むことを、お勧めして本日の責を果たしたい。

以上で、宗学論争は、本日の主題でないので切り上げるが、本証妙修がつねにその主要テーマであつたことにはかわりはなく、そしてそれが、『正法眼蔵』解釈の基準を形づくるところに問題の重要性があり、本証妙修の理解が揺れることは、取りも直さず『眼蔵』解釈の基準が揺れることになる。

初めに中祖一誠所長の言葉にあつた如く、今日『眼蔵』解釈の基準を、宗門的視点から明確に示すことが要請されている。その意味では一般の宗学論争は、それなりの意義があつたと思われるが、と云つて結論が今すぐ出る性質の

ものでもない。なんらかの形で、今後もつづくことが期待される。(昨年の駒沢大学『禅研究所年報』(一九九六)に、川橋正秀氏の「ピーター・グレゴリーへのリスポンズ」と云う興味ある論文が載ったいた。最近のアメリカにおける仏教研究の視点から本覚思想批判を論究したもので、立場や方法論がかわると、自分たちの日本で行っていることがよく解る。愛知県は豊田市在住の方で、一読をおすすめしておく——追記)

私にとって、この宗学論争は、どのような結果を及ぼしたか。『眼蔵』が本覚法門を批判しているのなら、これに直接する『眼蔵』の最古注、詮慧の『聞書』や、それを承けた経豪の『抄』は、果して『眼蔵』同様に本覚法門は恵心流を批判しているか。その確証が得られなければ、私の単に『眼蔵』からの本覚法門批判は半ば観念論義に終り、その意義を喪うことが、鏡島先生からきびしく指摘された。まさにその通りなのだが、悲しいかな天台学の領域を多年彷徨した身には、宗学の勝手が分からない。それを懇切に導いてくれたのが鏡島先生で、先生も本覚法門には田村芳朗氏との論争を通して深い造詣があり、私の研究過程を

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて(山内)

悉知していたので、巧みに『聞書抄』研究に私を連れこんでくれたのである。同門の誼とは、まことに有難いもので、これで教学から宗学に跳入する難しい契機を、私は容易に掴んだことになる。

もうひとつ幸運であつたのは、後輩に当たる河村孝道先生が『正法眼蔵蒐書大成』の中で、『聞書抄』の底本となる泉福寺本を写真化・解読化されていたことである。資料の面からも、またとない好機にめぐまれた。宗学論争と云う思いがけない出来事に遭い、また一方では鏡島・河村両先生の地道な研究に支えられて、今日の私の『聞書抄』の研究があると云って、決して過言ではない。

そこで、これから『聞書抄』の研究そのものについて触れる。いふなればやっと本日(の)主題に入るわけで、先程申しましたように、『聞書抄』とは、道元禅師の直弟子である詮慧が、『正法眼蔵』の提唱を椅子下で聞き書きしたものである。が、単なる筆記ではなく、これに注を加えたものであるから、立派な注釈で、これは前身天台僧であつた詮慧が、中古天台の聞書形式を『眼蔵』解釈に持ち込んだ

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

もの、とされている。

中古天台は私記の時代と云われる如く、注釈書が盛んに製作され、それは宗要・義科・問要の三科から成る。まず宗の概要を出し、これに注釈を施すのが義科で、さらに問答料簡するのが問要で、そのうち義科の発達したのがいわゆる聞書とよばれ、それは見聞とか私記とか私抄とかに発展する。

洞門で云うと、師の詮慧が『眼蔵』の『聞書』を書いたので、これを土台に弟子の経豪は『抄』を書いたことになる。両者合わせて『聞書抄』あるいは『御抄』とよばれるのは、それだけ重視されていたことを意味する。師資による共著的性格を、『聞書抄』をその始めから有している。

と同時に、詮慧も経豪も、道元会下となる前は共に叡山の学僧であり、当時の主潮である恵心流を学んだところから、『聞書』にも『抄』にも、本覚法門の用語が頻出する。それは口伝法門とよばれる如く、中古天台独自のものであり、正規の天台教学の知識だけでは理解できない。

先程も中祖先生が云われたのですが、『聞書抄』には、古来まとまった研究書がない。たいていの宗門の重要な資

料は、これまでに誰か先鞭をつけている。先行の論文か解説書があるはずで、おそらく鏡島先生が手を着けられたのが本格的研究の嚆矢と云ってよい。『御抄』と重要視されたりには、内容を分析吟味したものがない。『聞書抄』の研究に入ったものの、これには途方にくれた。

理由は、口伝法門の用語と、その思考方法を理解することが容易でなかったことによる。そのことが、だんだん解って来た。宗門でも、叡岳に登って天台学を修めた人は、その数尠しとしない。曾って在山の叻それらの人たちの経歴を調べたことがある。しかし、中古天台は口伝法門、世に云う本覚法門にまで至った人はない。と云うのは、出口のない袋小路のような秘伝秘儀に及ぶ口伝を、他宗門の者が学ぶわけではないのである。どういうわけか如上の経緯で、私だけが口伝法門の陥穽に堕ちたらしい。口伝法門の中を永いこと彷徨した時は、ずいぶんと貧乏クジを引いたものだと思っただけである。

そのことが逆に、『聞書抄』解説の役に立とうとは夢にも思わなかった。殊に『聞書』なら解るのである。詮慧の思惟に随いてゆけるのである。その注釈方法も、大方は恵

心流教学のものであり、特に教に懸けるばあいなど、類似のものが多い。

道元禪師や詮慧・経豪の時代の叡山では、もはや五時八教の中国天台の教判は、そのままでは通用しない。爾前、迹門、本門、観心という四重興廢の教判が盛行して、道元会下の前身天台僧たちは、二祖懐奘を始めとして、これら恵心流教学を修得されたのである。

であるから『聞書』は、つねに教を意識して書かれていると云つてもよい。教に繋いだ注釈が多い。当然のことながら、これでは後世批判が起こる。『聞書』は、天台腹による『眼蔵』解釈ではないかと。私もそう思う。しかし、教に繋ぐと一般的理解が得られる。現代人にも解る注釈となるから始末がわるい。まさかそこまで考えて詮慧は『聞書』を書いたわけではあるまい。おそらく初期道元僧団の、元天台僧たちを意識して、そこをねらって教に懸けた、とも思われるフシがある。

その教も、正規の天台教学ではない。当世流行の恵心流が下敷きになっている。このことを理解するのに時間はかからなかった。と同時に、教に足を取られた注がハッキリ

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて(山内)

見えてくる反面、本覚法門といかに宗意を弁別するか、『聞書』の苦心もまた解って来たのである。

このことは、『柏樹子』の『聞書』を見ればよくわかる。そこでは祖意と教意との同なることが、そしてまた別なることが、明らかに示されている。祖意と教意とは、是同是別(是れ同、是れ別)の関係にある、と云うのがそれである。この場合、祖意とは、私が常に用いる宗意の意味を、やや広めに取れば、祖意に外ならない。ここで『聞書』はいみじくも宗意と教意とに対する自己の基本的立場を、注釈上から示している。そこには是同是別と云う教の思考が根底にあり、『聞書』の注が教に流れる基因ともなっている。が、このような教の思考を全く用いないで、果して『眼蔵』注釈というものが書けるものなのか、疑なきを得ない。より突っ込んで云うと、宗意と教意とを明確に弁別しないで、『眼蔵』注解を、どうやって書くのか、私は識らない。近時の『眼蔵』解説は花ざかりであるが、宗外者はしばらく措く。宗門の中においても、この宗意と教意とのボーダーラインを弁別しない『眼蔵』解釈にお目にかかることが多い。

『正法眼藏聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

この問題を抱えて『眼藏』注解に最初に立ち向かったのが、外ならぬ初注者の詮慧であり、そこには『眼藏』提唱を直聴した有利さがあると云うものの、教意との弁別、いかなればそれは本覚法門と道元禅とをいかに書き分けるかと云うことであるが、その辛苦は想像を絶するものがある。私の視点から見ると、詮慧は、道元禅と本覚法門との書き分けに、大半のエネルギーを費やしている、とさえ思える。今日云うところの『眼藏』解釈の宗意からの基準づくりには最大の努力をしたことになる。そのために危ない橋を渡って、敢えて教に深く踏み込んだとも見られる。教に足を取られたワーストの例を、あまり重く見てはならぬ。それは本覚法門の表裏に通じなくては叶わぬことであり、大目に見てやるべきものと思う。この点からの『聞書』評価が、今日まで全くなされてないのは、どう云うことか。

この論稿を書いている時、鏡島先生の最近の作、『道元禅師』（一九九七年九月二五日刊行、春秋社）が、手許に送られて来た。その「はしがき」に、現時の『正法眼藏』研究は、昭和初期の道元禅ブームをはるかに超えた百花繚乱たる態であるが、

しかし、それにもかかわらず、最近の研究に対し、私は書齋の一隅に蟄居するを許さないものを感じる。それは極言すれば、盛んであるだけ弊が生まれているからである。宗門としては外見上の勢大に眩惑されることなく、解決すべき喫緊な課題を看取すべきである。

として、歴史的、書誌学的、思想的の三方面から、その解決すべき喫緊な重要問題を提起し論究している。

私の出来ることは、第三の思想的な面だけで、そこでは七十五巻本と十二巻本との、両系の位置づけ、意義づけが取り上げられている。この点に関して先生から、つねづね簡単な論文でもよい、両系に対する『聞書抄』研究からの見解を示せとのお言葉であるが、七十五巻本の検尋は済んだものの、まだ『聞書』の存しない十二巻本のパラフレーズは未完である。もう少し時間が欲しい。

私としては、その前に『聞書抄』の『眼藏』注解史における位置づけを、ハッキリさせなければならぬ。端的に云えば、私の学んだ天台教学では、天台智者の『法華三大部』を祖文と云い、これを注釈した荆溪湛然の『釈籤』『文句』『輔行』を祖釈と称して、祖文を解釈する基準とな

している。教宗では、この点ハッキリしているのであるが、『眼蔵』の場合は、『聞書抄』を御抄と云って尊重するものの、必ずしもその注釈に祖釈としての位置を与えているかは疑問である。

洞門における伝統宗学は、『御抄』の解釈を至上と仰ぐ一派であると云うものの、むしろ面山の『聞解』を最重要視している観がある。『眼蔵』を椅子下で直聴した詮慧の『聞書』に祖釈としての位置を与えないどころか、並みの注釈書の一つとしか取り扱われていない。これは『聞解』を頂点とする江戸宗学の構造に問題があり、それが恰も伝統宗学であるかの如く取り扱われるところに、そもそも問題があると云えよう。

それは四百年以上のダークエイジを経て形成されたものゆえ、伝承された宗学のあるうはずはなく、その基底に文献学・書誌学が置かれているのは見るが如くで、それはそれなりに宗学形成には不可欠の要件ではあるが、それだけで宗学が出来ると云うものでもない。却って宗学を作る苦勞が、じつは『聞書抄』をやっている中に、だんだん解つて来た。

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

そこで、話はとぶが、この辺で『御抄』にまで、『眼蔵』解釈の原点を返してみたらどうか、と思う。すると、どうなるか。『眼蔵』の理解は、すくなくとも本覚法門批判の線に副ってなされねばならず、喩えば本証妙修なども、その解釈は本覚法門否定の上になされなければならない、と云うガードラインが出来る。この点が重要なのであって、『眼蔵』解釈の基準を宗門の立場から構築するといっても、それはあくまで観念的発言でしかなく、実際には、このようにしてはならないガードラインを地道に設定してゆくしかない。

その手掛かりとなるのが、外ならぬ『眼蔵』に直接する詮慧の『聞書』であって、彼は充分その責務を果たしているのである。すなわち宗意と教意との書き分けを通して、具体的に本覚法門と道元禅との弁別に成功していると云ってよい。この『眼蔵』解釈の基本線は、宗門としては守らなければならない。と同時に、始めからテーマとして来た本証妙修の解釈に、いやしくも本覚法門的解釈を加えてはならない。

私には『眼蔵』解釈の基準を、宗門の立場から積極的に

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

構築する力量のないことは、己を顧みて充分わかっている。が、如上の問題意識を持たない『眼蔵』理解が、あまりに横行しているのは、誰の目にも明らかであろう。極言すれば、現時では、本覚法門批判を抜きにした『正法眼蔵』解釈は成り立たない。『聞書』成立の時点に、『眼蔵』解釈をひとたびは返して見るべきである、と思う。

そしてそれは、若き日の叡山修学期に本覚法門は恵心流の洗礼を受け、道元会下に投じたからは椅子下で『眼蔵』提唱を直聴すること十余年に及ぶ詮慧だけがなし得た偉業であつて、余人を以て替え難い。他にすくなくとも二系統の『聞書』が存した如くであるが、現存しているのは詮慧・経豪の『聞書抄』のみであることも、無限の意味を宗史自体に問いかけている。直聴した資料が皆無なら、『眼蔵』解釈は全て文献学・書誌学を基盤に、新たに思想的に組み立てるしかない。江戸宗学が、殆どそれに該当しよう。それが宗学勃興とはなり、伝統宗学と称されて現在に至って、逆に『眼蔵』注解の原点であるべき『御抄』を、江戸宗学を以て限定するかの如き観があるのは、いささか行きすぎではないか。

始めに江戸宗学ありき、の理由は、その困難を極めた成立事情を察すれば、私とて充分理解することが出来る。ただし如上の経緯により、私は江戸宗学は一切知らないという作業仮説を立てて、『聞書抄』研究に取り組んだ。中古天台の本覚法門から逆に『聞書』に降りて来たので、この点、従来の宗学研究とは全く逆の方向を取った。が、これが極めて無理のない合理的な方法であることは、次第に理解されよう。

そこでは繰り返すように『聞書』が、『眼蔵』注釈の基本を作るべく、本覚法門との苦闘のすえ、両者を書き分けようとしている。この苦闘があればこそ資の『抄』は、教との面倒なかかわりあいを師の『聞書』に任せて、ひたすら宗意のみを發揮すべく努めている。まことに巧みな連携プレイを師資の間で行っている。その意味では、『聞書抄』と共著的性格を与えるのに相応しいものがある。

けれど、教にかかずらった『聞書』と、教の清算の上に宗意の發揮のみを努めようとした『抄』とは、その注釈姿勢の上で大きな差異が出てくるのを否定することが出来ない。共著的性格を表面上は有するものの、内容的には、両

者かならずしも同じ方向を向いてはいない。と同時に、ここに教から宗（意）へと移行するプロセスが、『眼蔵』注釈の上から早くも見られて、無限の興味を感じる。『抄』における宗意形成の過程が、それなりに読み取れるのである。宗学の機微というか、その醍醐味が、多少解りかけて来た昨今である。

それにしても『聞書』の教への踏み込みは、決して深いものではない。引き返す歩数をあたかも測っているかの如き慎重さであるが、それでもひとたび教にかかずらうと教に足を取られて立ち往生している注が随所に見られる。

私の恩師衛藤即応先生は、後半生を『眼蔵』の校訂に捧げられ、晩年『辨道話義解』（『正法眼蔵序説』）を著されたが、根が教学者だけあって、そこには教に懸けた注釈が数多く見られると共に、教から早めに足を抜いて宗意に入する苦心を人知れずこころみられている。そのことが今日漸く解って来た。

恩師の驥尾に付して、及ばずながら教学から宗学へと参入した私にとって、上掲の『辨道話義解』は、『聞書抄』研究の指南書とも云うべきもの、片時も座右から離れたこと

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

とはない。この書なかりせば、とても恐ろしくて『聞書抄』のパラフレーズなど独りで出来るものではない。思えば師恩を感じるこの頃であるが、欲を云えば『仏性』の巻の義解を書いて欲しかった。『辨道話』なら教に閑説するところがあるから、なんとか解読の手がかりが掴める。この点、『仏性』の巻は、その性質上、唯識の知識がなくては、その完説は難しい。唯識や華嚴に深い造詣と業績のある衛藤先生以外に、これをなし得る人は宗門にいない。

『聞書抄』の研究過程で、『仏性』の巻は、『続』の後半と、『第三』の前半で取り扱ったが、計八百枚の原稿を費やしても要を得ない。その苦闘の中で、しみじみ恩師に『仏性』の巻の義解があつたらな、と思つたものである。

いずれにしても『聞書抄』の研究は、『眼蔵』注釈の研究にすぎない。永い間、『法華玄義』を『釈籤』で、『摩訶止観』を『輔行』で院生に講義してきた身には、正直云つて『聞書抄』のような注釈書は扱い易い。注釈書なら、いかに難解であろうと、なんとかなる。が、『眼蔵』本体とはそれは別物で、注解すればするほど『眼蔵』は、却つて彼方に遠のくのは、いかんともなし難い。所詮は、理解^{りげ}仏

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

教にすぎないことが改めて顧みられる。と同時に、詮慧や経豪の聞書派ともいべきグループが、高祖滅後は懐奘禅師の正統派から疎外されて、京都は高祖茶毘の地の永興庵でひたすら『聞書』と、そして『抄』の撰述に当たったことも、解るような気がする。

唯一『聞書抄』が遺されたことによって、高祖生存中の『眼蔵』理解が、どのようなものであつたか、その片鱗を窺知することが出来るのであるが、それが果して『眼蔵』を把握する正道であるかと云えば、否であろう。

もし聞書方式で『眼蔵』が掴まえられるのなら、聞書を書くべき最適の位置にあつた二祖懐奘が、まっ先に聞書を撰じたはずである。鏡島先生の言によれば、従来『聞書』は、高祖の聞書を懐奘が書いたとか、懐奘の聞書を詮慧が書いたとか、云われる如くであるが、いずれにしる懐奘が一枚噛んでいるように云われるのは、その聞書を撰すべき最適任者であることをもの語る以外のなにもものでもなからう。

じじつ『聞書抄』の研究に従事していると、もし奘祖ならばこのようには書かなかつたであろうと、申し訳ないが

『聞書』や『抄』の撰者の力不足を嘆かざるを得ない場面に遭遇する。そのたびに懐奘が『聞書』を書いてくれたらとの念はつよい。

が奘祖は、『眼蔵』を浄書し整理し、あるいは編するのみで、その『聞書』を撰しようとはしなかった。これが正解であることが、七十五巻本に所依する『聞書抄』を、ただどしく検尋した現在、やっと理會できたとは皮肉なことである。『眼蔵』は、注釈を施してはならないのである。それを一番よく識っていた懐奘は、ひたすら『眼蔵』そのものの嗣統をこころみ只管打坐に徹したのである。

詮慧や経豪の、天台寺院に囲まれた永興庵で、『眼蔵』注解に心血を注いだ聞書派ともいべきグループが異端視されたとしても、決して不思議ではない。その証拠に、『聞書』も『抄』も、その所依とする『眼蔵』は七十五巻本だけであり、十二巻本『眼蔵』の存在は知らなかつた如くである。

鏡島先生から、両系の比較吟味を、『聞書抄』研究の立場からこころみよ、と云われても、十二巻本に『聞書』も『抄』もない以上、おいそれとは出来ないのである。不遜

ではあるが、詮慧・経豪になり替わって、『聞書抄』の延長線上で、十二巻本を注解する作業を先ずこころみねばならぬ。比較対照は、それからのななしで、今こころみているが、もう少しかかることは先に述べた。

詮慧が十二巻本の存在を知らされなかつたのは分かる気もするが、『抄』の成立は高祖滅後五十六年である。それでも経豪は十二巻本の存在を知らなかつたとすれば、聞書グループは完全に永平寺からはシャットアウトされていたことを意味する。

が、果して『聞書抄』を抜きにして今日、われわれ理解の徒は、私も含めて、『正法眼蔵』を理会することが可能であるか。答は、否であろう。詮慧が、危ない橋を渡って教えと踏み込んで、本覚法門と道元禅との書き分けに努めたからこそ、かろうじて今日本証妙修についても、本覚法門的解釈を禦ぐことが出来るのであって、『眼蔵』解釈の基準なるものを論ずることが出来るのも、ひとえに『聞書抄』あつてのことであろう。その意味では、詮慧も経豪も、宗史上掛け替えのない大きな仕事をしているのである。なお、一言すれば、本証妙修を以てする宗意表現には、

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

先の宗学論争を通して疑義あることを、私も呈しておいた。本日、これを用いるのは、聴衆への利便だけであつて、他意はないことを申し添えておく。本証妙修になじんだ宗侶の意識は、徐々に替えてゆくしかない。

従来の宗学の『眼蔵』解釈に、本覚法門的理解が全くないかと云えばウソになる。それは本講演の始めの本証妙修をめぐる諸問題を提起した時、話した如くである。と同時に、この本証妙修という成語自体に問題があることは、すでに指摘されるところ、今日はこれ以上深入りする時間はない。

そこで最後に、『眼蔵』の現代語訳について私見を述べしておく。それは『眼蔵』をいかに解するか、その基準を示す問題と密接にかかわっているからである。

『眼蔵』を現代人が理解する場合、その現代語訳の必要性を識らない筆者ではない。私も若いころその必要性を主張し、『眼蔵』の現代的解釈に努めた幾つかの論文を書いた。これには次のようなエピソードを話した方が早い。曾つて晩年の樽林皓堂先生と起居を共にしたことがある。あの学園紛争の時、疲れ果てるとよく二人して宗学の話をし

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

た。その時私は先生に、『眼蔵』の現代語訳の話をもちかけた、再度に亘って……。先生は、こう申された。それは骨肉と化した『眼蔵』の詞を私なりに持つているが、全部と云うわけにはゆかない。それが出来れば『眼蔵』が書けることになる。私は、この言を聞いて納得した。それ以来、先生に『眼蔵』の現代語訳をすすめたことはなかった。

いま曲がりなりに七十五巻の『聞書抄』の検尋を了えて見ると、そのことがよく解る。短く一例をあげると「諸法実相」の巻の『抄』注に左の文がある。『眼蔵』本文の、不曳ニ入ラスイテス進歩ノモノアママリヌヘシ退歩ノモノト、コホリヌヘシを注して、『抄』は左の如く云う。

曳ノ上ニハ不曳ト云詞アルヘシ進歩退歩ノ詞モ門ノ上ノ道理也進退ニト、コホルヘキニアラサルナリ

『眼蔵』本文は至上の表詮となつてゐる。『抄』は敢えてこれに注を付する。が、その注が、これまた至上に完成されてゐる。

ここらならずも、これを解説すれば、それは「曳ノ上ニ」、

「不曳」の詞を云うようなものだ。進歩退歩の詞も、解脱の「門ノ上ノ道理」に外ならぬ。進・退に拘わることがあつてはならぬ。

このように現代語訳してみても、曳の上に不曳の詞をいう意味が解らなければ、また、解脱門の上の道理がなにを意味するのかが解らなければ、ただ現代語訳しただけでは、いったいなんのことか解らぬ。

ただ一言誤解のないように申し添えれば、『聞書抄』の現代語訳は成り立つと云うことだ。それは『聞書』も『抄』も或る種の注釈である以上、それは『眼蔵』の云い換えに外ならぬ。とすれば現代に語訳することも許されてしかるべきである。伊藤秀憲教授が、苦心して『聞書抄』を現代語訳しているが、私はこれを励まし、その完結を念じている。完成すれば現代における大きな業績となる。しかし、それでは『眼蔵』自体の現代語訳は可能か、となると現在の私は否定的にならざるを得ない。

と云うのは、『眼蔵』の注釈は、『聞書』のように一旦は教に振るか、それとも『抄』のように教の清算の上に宗意を収斂する以外にない。とすれば『抄』の表詮が、上掲の

一例に見る如く、その限界なのであって、これ以上注する
と、すなわち云い換えると『眼蔵』そのものは変質してしま
うことが、『抄』注の流れから随所に指摘できる。やはり
無理だなど痛切に感じながら七十五巻を了した次第であ
る。

と同時にこれは、先程申した理解^{りけ}仏教からの『眼蔵』参
究の限界を、また示すものとして興味ふかい。云うなれば
私は、『聞書抄』と云う注釈を通してしか、『眼蔵』を理解
していない。それが解っただけでも、迂遠な私にとつては
大きな収穫とも云うべきで、逆に云うとこれは『眼蔵』参
究の自己の姿勢が、改めて問われている、と云うことにな
る。

そもそも私は、『正法眼蔵』の研究をする意志を、学問
を志した当初から明確に持っていたわけではない。恩師の
衛藤先生から宗学をやるには天台学も必要であると云うこ
とで、叡山に登ったが、出来れば中国天台だけやっておし
まいにしたかった。すなわち生涯で『法華玄義』と『摩訶
止観』、それに『法華文句』の三大部講義を書ければ、そ
れでよい。ありていに云えば天台学者として仕上がりたか

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて(山内)

った。

それが、やはり宗学とは縁が切れず、日本天台は本覚法
門にはまり込んで、とうとう『眼蔵』ならぬ『御抄』研究
が、生涯の行き着くべき所となってしまう。まさか『御
抄』が終点となるとは夢思わなかった。人生には思いがけ
ないことが多い。なかなか目的どろりにいかないものであ
る。それにしても洞門の寺に生まれて仏飯を食^はんだ者は、
最後は『眼蔵』を読まないと思ねないらしい。『眼蔵』を
やるのが嫌で、いくら逃げ回っても、最後はどうとう道元
さんに摺まる。道元禪師と云う人は、そういう人だこの
頃は観念して、『御抄』が了ったら、すこしでも江戸宗学
は面山の『聞解』を齧^はって残生を了えたい。

そんなわけで私が、腰を据えて『眼蔵』を読み始めたの
は六十歳を過ぎてからで、本当に遅すぎた。あと五年早け
れば、いや十年早ければ、もう少しなんとかなったのに、
と後悔臍をかんでいる反面、『眼蔵』のような至高の宗典は、
六十過ぎてから読んで丁度よい、とも思えるから妙なもの
である。六十を過ぎたら『眼蔵』を読もう、そんな呼びか
けを宗侶にしている昨今である。

『正法眼蔵聞書抄』の研究過程と宗学論争を顧みて（山内）

拙書を読んで頂く方に、ひと言参考までに申し上げますと、第三卷あたりまでは皆目先が見えず、文字どおり手さぐりの状態で書きました。われながら晦渋の感がある。それが「諸悪莫作」から発した因果の追究も、第三卷は「仏性」に至ると、ひとまずの結末が得られ、第四卷以降になると多少余裕も出て来て、また『聞書』や『抄』の性格も纏めて、第五卷・第六卷に及ぶとかなり解り易くなっている。終卷の第七卷は、読者向きに書くことを心掛けたつもりで、従って逆に第七卷から読まれるのも一案かと思われる。

またエキスだけを集中的に読まれるのなら、第五卷の「三界唯心」「諸法実相」あるいは第六卷の「法性」「遍参」等が、これに該当すると思われる。

以上で、私の話は終わるが、教学から宗学に参入した私は、なかなか教の残滓が抜けない。おくれればせながら『摩訶止観』と『正法眼蔵』と云う一書の刊行を、近く予定している。いささか古証文の出しおくれの感があるが、不束かな『摩訶止観』講義を受聴した院生たちへの、ささやか

なつぐないになるかと思ひ、老眼を拭いながら校正に努めている次第である。

当大学を訪れたのは、二十年ほど前であつたが、今日の充実ぶりはまさに驚異的という外はない。

そこで当禅学研究所に、お願いやら希望を申し述べておく。それは駒沢大学内にある宗学研究所は、その性格から宗学に求心的で、純粹に宗学に収斂してゆく傾向を持つ。いきおい他宗との交流は第二義的になる。禅の国際化のためには、もつとゆとりが欲しい。

この点、当禅学研究所には、より幅ひろい視野からの禅学研究を期待する。具体的に云うと洞門には、曾って忽滑谷禅学という、かの胡適をも傾倒させた、国際的視野に立つ禅学が盛行した。それなるが故に、昭和初期の正信論争を惹き起こしたわけだが、宗学に収斂するのは宗研だけで沢山で、当禅研はむしろ禅研の名にふさわしく、国際的視野に立った、殊に二十一世紀の中国を見据えた禅研究へと向かわれることを希望する。それはまた忽滑谷禅学の復興をも意味する。御一考願えれば幸甚である。